

令和2年度アーバンデザインスクール第3回実績報告書

1. 開催日時

令和2年12月12日（土） 10時30分～12時00分

参加人数: UDCBK での視聴：1名、オンライン：10名＝計11名

※オンライン会議システムとUDCBKのオープンスペースでの視聴を併用

2. テーマ

「成熟時代の都市空間再編」

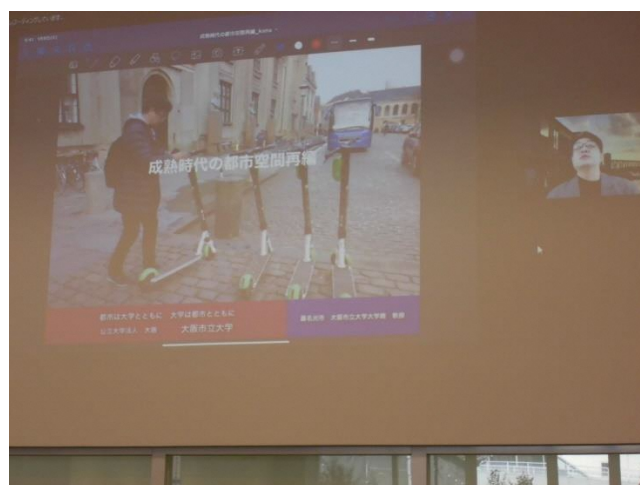
- 本スクールは、「これからの健幸都市に向けて～with/after コロナのまちづくり～」を共通のテーマとした5回シリーズで開催される連続講義の第3回目である。
- シリーズにおいては、新型コロナウイルス感染症をきっかけとして生じた新しい時代において、どのようなまちづくりを行っていくべきか。異なる分野の専門家を講師に迎え、多角的な視点から、「これからの健幸都市」を展望する。
- 第3回目の本スクールでは、人口減少、成熟社会の到来、そしてwith/after コロナ時代を見据えたこれからの都市空間について、講師の嘉名光市氏に話題提供いただきながら、武田史朗氏（UDCBK副センター長、立命館大学理工学部教授）のコーディネートのもと考えていく。

3. 話題提供者

嘉名 光市 氏（大阪市立大学大学院 工学研究科 教授）

4. 話題の概要

嘉名氏による講演



ア. 都市計画の歴史

(イ) 都市計画と感染症

- 成熟時代には、まちをつくった当初とは、社会や暮らしが変わりつつある。時代に合せて、まち自体を変えていかななくてはいけない。
- かつて、都市計画 = スクラップ・アンド・ビルドが一般的であった時代が長くあった。今は、昔からあるものを活用していこうという流れがある。
- 5 世紀から 15 世紀のおよそ千年間の中世において、ヨーロッパの都市は、城壁で囲まれていたが、これは、外敵から生命を守るという意味合いが強かった。その中で、共同体という意識が生まれてきた。
- しかし、城壁の中でひしめき合うように暮らしていることは非衛生的であり、ペストが流行した。14 世紀には全人口の 4 割が死亡するということがあった。そのような歴史があるためか、現代でもヨーロッパの人々は、感染症に対してくじけないという思いが強いように思われる。
- 14 世紀のペスト、15 世紀から 17 世紀の天然痘など人類はおよそ 1 世紀ごとに感染症に見舞われている。その主な原因は、交易などを通して、人の移動が激しくなってきたことによる。
- 20 世紀のインフルエンザの流行も、産業革命によって農村部から都市への人口の移動と密集に起因している。また、「スペインかぜ (1918 年～1920 年)」は、第一次世界大戦において罹患した米兵が各地に散っていったことが原因であると言われている。
- ただ、現代がスペインかぜの時と異なるのは、病原体 (ウイルス) を特定しているということ。当時は原因もわからず、感染症と闘っていた。その意味で、新型コロナウイルス感染症は、当時は不可能であったワクチンが開発も可能となり、治療法が確立されていくと思われる。
- 感染症と都市計画は密接に関わっている。世界で、近代的な都市計画がはじまったのは、およそ 150 年ほど前である。日本では、1919 年にできた都市計画法から始まり、百年の歴史を持つ。

(イ) 都市計画と保健衛生

- ロンドンで、1849 年にコレラが大流行した。疫学の専門家であるジョン・スノウ医師がその分布を探ったところ、ある民営の水道会社を利用している地区に感染が集中していることが分かり、その水源である貯水池に菌が発生していることが判明した。
- そのような経緯から都市計画においては、上下水道の整備ということが重要視されるようになった。
- 関東大震災後の帝都復興を担った後藤新平は日本の都市計画の中では重要な人物で

ある。後藤は、医師であったので、台湾や満州という当時の日本の植民地において都市計画を担当した際、衛生的な視点を重視した。

- 大阪市の第7代市長（1923年～35年）、関一は、大阪最初の都市計画（御堂筋など）を立案した。関はドイツに留学した際、衛生的な概念の重要性を知り、大阪の都市計画に反映させた（公園や住み心地の良い住宅など）。
- ロンドンでは、工業化に伴い、18世紀末から19世紀の半ばにかけて人口が2.5倍の250万人にまで増加し、住宅不足や貧困層の形成、劣悪な衛生・環境問題が生み出された。
- この時代において、コレラがヨーロッパに広がり、それを受けて英国では1848年に公衆衛生法ができた。
- また、英国のエベネザー・ハワードは世界初のニュータウンを提唱し、ロンドン郊外（レッチワース）に1903年にまちを完成させた。その中においては、緑の豊かさや健康と都市の利便性を両立する田園都市の概念が提示・実践されている。
- 米国のC.A.ペリーは、「近隣住区論」（1924年）を唱え、人口増加が著しいニューヨークの郊外であるニュージャージーに開発する新しいまちのための理論をつくった。
- その考え方においては、コミュニティ・センター（例えば教会や小学校など）を中心として、その周りには適宜公園などを配置し、通過交通が入ってこないように外側を幹線道路で囲み、交差点に商店を集めることをルールとした。そして、小学校区を単位とするまちづくりが提案された。
- 例えば、日本の泉北ニュータウンにもこの近隣住区をモデルとしたまちづくりが行われており、日本のニュータウン開発の標準的な考え方となっている。



イ. 成熟化した現代の都市計画と空間の再編

(ア) 現代における都市空間の再編

- スペイン風邪の流行の後、このような田園都市やニュータウンのような郊外での生活が流行したが、これは今のコロナ禍にけるテレワークやワーケーションと似たようなところがある。
- また、自転車通勤が推奨されるなどこれからモビリティ（移動手段）も変わっていくように思われる。さらに、住宅もこれまでは「住む」ことに特化していたが、在宅勤務の増加などによって、「住む」ことと「働く」ということを区別することが難しくなっている。
- 従来の都市計画においては、住宅地、商業地、工業地を明確に分けていくことが基本となっていたが、今後は、そのような発想だけでは、まちをつくっていくことが難しくなっていくと思われる。
- デンマークのヤン・ゲールは著書“*How to study public life*”において、都市計画は1950年代まで伝染病との闘いであったと述べている。その後、人類の死の主要な原因が心臓病やガンに移り、今は、生活習慣病が主因となってきている。これは都市での暮らし方や働き方（自動車やPCの前での仕事など）と密接につながっている。
- よって、これからの都市計画においては、このような生活習慣病の原因となるライフスタイルのことも考えていかなければならない。例えば、公共空間において、もっと歩くようなライフスタイルを確立することなどが必要となってくる。
- また、現在は、コロナ禍において再び伝染病が増加しており、伝染病と生活習慣病の二つに向き合っていかなければならない。
- 「歩く」という観点では、ジェフ・スペックが唱える“*Walkable City*”がある。それは、都市はもっと歩きやすい空間を目指すべきであり、そのことによって人々の外出機会が増えることで健康増進も図れる、というライフスタイル全般を視野に入れた概念である。
- 米国のNACTO（全米都市交通担当者協会）の構想では、公共交通や自転車と自動運転を組み合わせることで、都市において人が歩く空間を大きくとることが目指されている。
- また、NACTOでは、コロナ禍の状況下での、衛生分野や商業分野における道路空間の使い方についての緊急提言も行っている。
- また、日本でも2025年を目途とした完全自動運転を見据えたロードマップも官民で構想されている。自動運転が実現されれば、モビリティの在り方も自家用車中心から変わっていき、その結果、都市の在り方も変わってくる。
- 日本では、これまでの人口増加を前提とした郊外化した都市を、人口減少下において、いかに「たたんでいくか」を考えなくてはいけない。それが、都市機能を下げずに、いかに都市を集約していくか、という「コンパクトシティ」である。

(イ) 先進的都市の事例

- コンパクトシティを構想する上で参考になるのが、オーストラリアのメルボルンの“The 20 Minutes Neighbourhood”という考え方である。これは、公共交通や徒歩といった移動手段を組み合わせて、20分間の移動で、目的とする場所に行ける都市をつくろうとするものである。
- これまでの都市計画では、住居、商業、工業を明確に分ける用途純化が中心であった。しかし、人口が減少する中においては、住宅から離れた場所に自動車で移動するような生活は成り立たなくなってくる。よって、用途純化から住まいや仕事、遊びや楽しみの場所を“mixed”（混ぜる）ことが重要になる。
- メルボルンの他にも米国のポートランドもこのような考え方のもと都市計画を行っている。
- 日本では、富山市の事例がある。まちの中心部には「まちなか賑わい広場」があり、まちの中にはLRTなどの公共交通が導入され、自転車の活用も促されている。また、広場では、こどもが遊べたり、イベントが行われたりしており、行ってみたいくなる場所とすることが目指されている。
- このような取組によって、公共施設や住宅の再開発が行われたり、シャッターが閉まっていた商店街に活気が戻り始めたりするなどの効果があった。
- 他にも公共施設を中心市街地活性化のための装置として活用する様々な取組が行われている。例えば、動物園や美術館に、孫と出かけると入場料が無料になる事業では、にぎわいを生み出す以外にも、高齢者の外出機会増加によって健康増進が図れるという効果がある。
- また、花を持ってLRTに乗車すると運賃が無料になるという取組は、花き産業の活性化とともに、公共交通への注目を促し利用を増やしていくことが目指されている。
- このように、政策の正しさ以外にも、みんながやってみたくなるようなアイデアや視点を取り入れていくことが重要になる。
- 富山市では、これら一連の政策が行われ、公共事業が先行した面もあるが、民間の開発も促されている。
- デンマークのコペンハーゲンでは、ヤン・ゲールが50年以上にわたって、公共空間の使い方を計画している。
- コペンハーゲンでは、寒い気候においても、オープンスペースに人が居ることがライフスタイルに組み込まれている。しかし、このような風景、ライフスタイルは50年以上にわたって築かれたものである。
- コペンハーゲンでは、1962年から都市空間の使い方を変化させてきている。もともとは、自動車がまちなかを通るまちであったが、徐々に自動車を通れなくする空間を増やし、歩行者中心のまちに変えていった。

- 公共空間においてハードの面をつくれれば、すぐに利用者が増えてライフスタイルが変わっていくというようなことはない。使いたくなるような場所にして、時間をかけて、人々のライフスタイルを成熟化させていくというスタンスが必要になる。
- コペンハーゲンが提唱しているものは、“More Urban Life for All”（屋外での暮らしをもっと多くの人に）、“More People to Walk More”（もっと歩くまちにしよう）そして、“More People to Stay Longer”（もっと滞在時間を長くしよう）である。特に、滞在時間の長さという点では、単に人の通行量を増やすということではなく、居て楽しいまちをつくろうという考え方が背景にある。
- カフェの椅子の数も数十年かけて増加してきているが、こういったまちなかの変化の数値を記録し続けるということが重要となる。
- また、特性の異なる施設をまちなかに点在させることでより多くの人にとって滞在時間が長くなる工夫をしたり、公共空間で自転車が使いやすいようにする取組を行ったりなどしている。
- ニューヨーク市では、タイムズスクエアなど中心部の公共空間にベンチやテーブルを置いて個人が思い思いに使えるようにする取組を行っている。この取組のために6年ほどをかけて社会実験を行い、交通上の支障がないかどうかを検証した。
- ニューヨーク市での取組を指揮していたのが、市の交通局長であったジャネット・サディック=カーンである。彼女は、なぜ道路が自動車中心になっているのかということについて疑問を感じ、もっと人中心の空間になるべきであると考え、様々な部局と闘っていった。
- 大阪市では、難波駅前をもっと歩行者主体の空間に再編しようという取組が始まっている。また、御堂筋では交通量が減少してきたことにより、車線を減らし、歩行者や自転車が使える空間を増やそうという計画が行われている。
- 御堂筋の計画においては、空間の使い方を考える社会実験（ベンチを置いたり、自転車が使える範囲を制限したりするなど）を行っている。最終的には2037年の御堂筋100周年の時に、完全に歩行者だけの空間となるように段階的に整備していく。
- 梅田駅前の再開発事業では、都市公園の周りに施設を配置するような、オープンスペースを中心とした開発が計画されている。
- また、神戸市でも、JR や私鉄、公共交通などが集まる三宮駅前を、より人が中心となる空間となるような再開発が行われようとしている。
- 2025年の大阪・関西万博では、そのコンセプトとして「未来社会の実験場 People's Living Lab」が据えられており、まさにアーバンデザインセンターの考えに合致するものであり、今後、様々な万博と連携していく可能性も期待される。



5. 質疑応答

(1) Q: [コーディネータ 武田史朗氏より] 日本でパブリックスペースやコンパクトシティという場合、どうしても商業集積して、人が集まり、資金循環が生まれ、民間が乗り出していくというような雰囲気が強いように思われる。もっと、日常生活で場所を共有するデンマークのようなことをしていかななくてはいけないと思うが、草津市を想定した場合、どのような可能性があるか。

A: 草津川跡地公園というのは面白い場所だと思われる。最近では不動産会社が公園や通りの再開発に乗り出している事例もあるが、開発が行われることによって、まち全体がよくなることにつながらなければ意味がない。例えば、公園の中にショッピングセンターをつくることで、まちなかのお店がつぶれてしまっははどうしようもない。そうではなくて、まちなかにも人がにぎわう仕掛けが必要になる。富山市には「まちなか賑わい広場」があり、そこを利用してお酒を飲むイベントを行う場合は必ず90分で終わるようにしている。そうすると参加者は少し物足りなくなり、2次会としてまちなかのお店に行くようになる。広場は、人が集まるきっかけにはなるが、さらにそこから人がまちに流れていくまでをデザインしていく。草津川跡地公園も、人が集まるきっかけだけでなく、まちに人を呼び込むまでを関係づけていくことが大切だと思う。コペンハーゲンでも商業施設はあるが、例えば展覧会を開催する場合、市内に3か所ほどある美術館で分散開催している。そうすることで、市内を人々が巡るようになる。他にも無料で過ごせるような空間も用意されている。そういった一連のプログラムやラインアップで考えることが重要である。

(2) Q: 郊外団地、ニュータウンにおいて「ウォークブル化」の取組事例はあるか。

A: 「ウォーカーブル化」を直接進めるような取組はあまり聞かないが、モビリティ関係の取組は郊外ニュータウンにおいて最近、熱心に行われているように思われる。例えば、河内長野市にある UR の南花台の団地では、高齢者が一人でも暮らしていけるようなモビリティを確保するため、自動運転のバスを走らせる社会実験が行われている。

(3) Q: MaaS を使って遠く市街地へ出かけるという取組はあると思うが、まちの中を巡って、人と人がつながるような空間設計の事例はあるか。

A: 「まちのね浜甲子園」という団体が団地再生を行っている。一般に団地再生のスキームは、建物を集約化・高層化して、空いた土地を民間のデベロッパーに売却して収支をまかなうという手法が取られる。この団体では、デベロッパーにお金を出してもらってコミュニティの拠点をつくるという事業を行っている。そして、子育てをしている人や高齢者の居場所をつくっている。そういった、元々団地になかった機能を入れていくという取組は全国的にも広がっている。

(4) Q: 実際に南草津駅周辺における公共屋外空間の在り方を考えるとき、UDCBK や大学もある中で、どのような可能性が考えられるか。また、草津駅周辺と南草津駅周辺は現実的には相互に行き来するのは難しく、別のエリアとなっている。草津駅周辺の市街地活性化とは方法も異なると思うが、何かアドバイス等をいただけないか。

A: 例えば、大阪市立大学にある広場でも、その使い方について3年ほど社会実験を行っている。3年ほど続けていると、今まで使われていなかった空間でも、お昼を取ったり、本を読んだりする人が増えてきているように思う。屋外空間だけがあってもなかなかしんどい。コペンハーゲンがうまいのは、市場の中に人が集まる屋外空間をつくったことである。そうすることで、市場で買ったものを広場で食べることができる。そういった施設と屋外空間を重ねることで新しい景色をつくっていけるように思う。大学がある草津市であれば、パブリックスペースにキッチンカーを持ってきて、そこに学生が集まるというようなことも考えられる。恒常的に何かをつくるというのは難しいこともあるので、まずは一つのシーンからつくっていくというようなことになるのではないかと思う。

6. まとめ

- 都市計画は、感染症との闘いの歴史でもあり、感染症への保健衛生対策という観点から、都市の在り方が変化し、発展してきたと言える。
- しかし、成熟化した現代においては、感染症から生活習慣病へと対処すべき疾病が変わってきた。また、従来の用途純化を基本とした都市計画では高齢化、人口減少社会に対応できなくなっている。そのため、例えば、住まいや働く場所、商業施設等

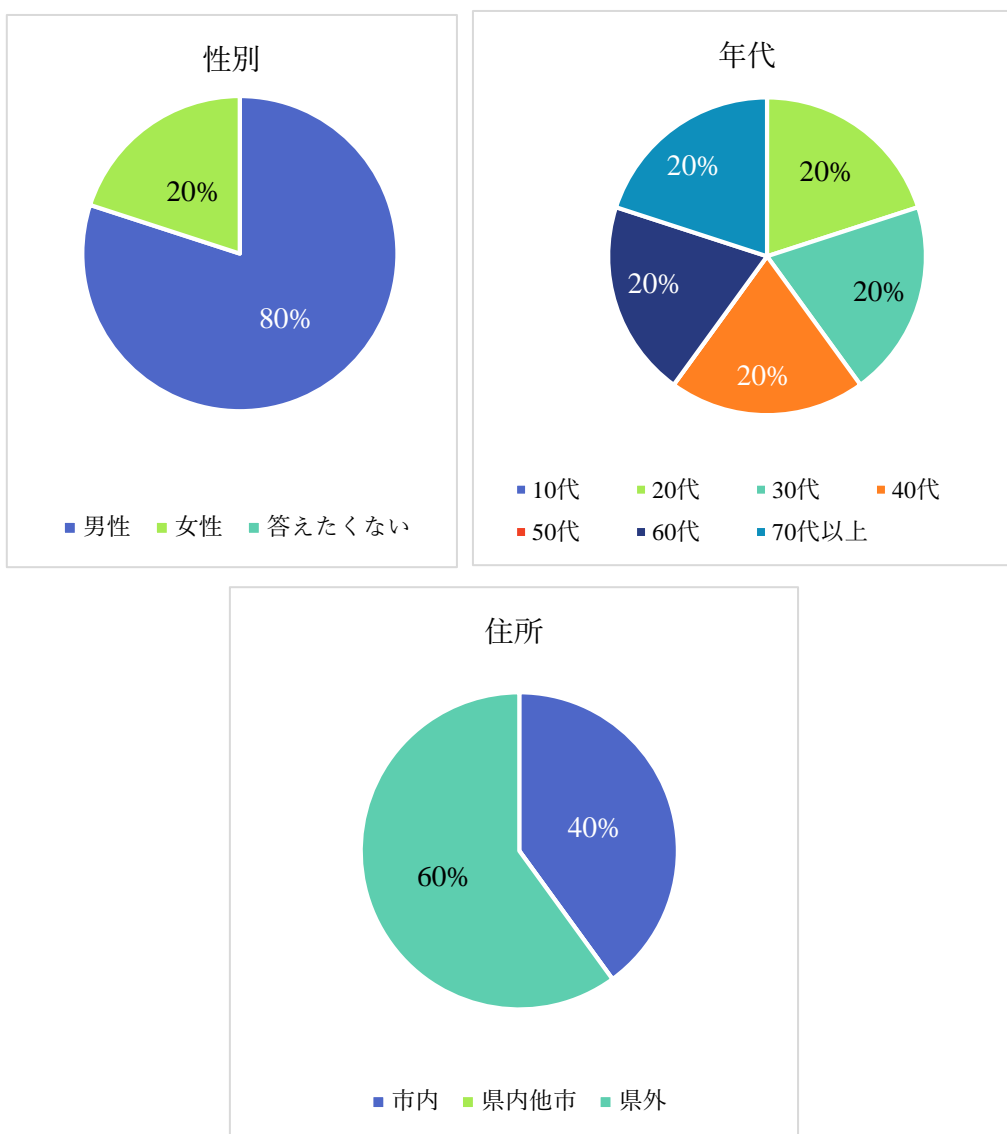
が適度に混在し、健康的に歩いて暮らせるまち「ウォークブルシティ」へ都市を再編するための都市計画の必要性が高まっている。

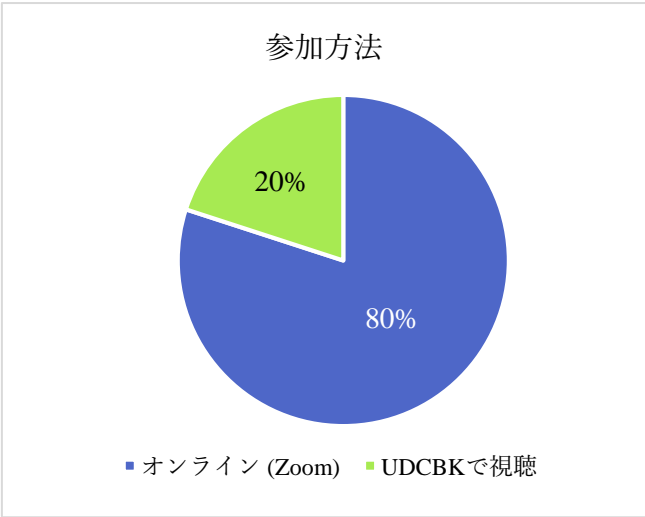
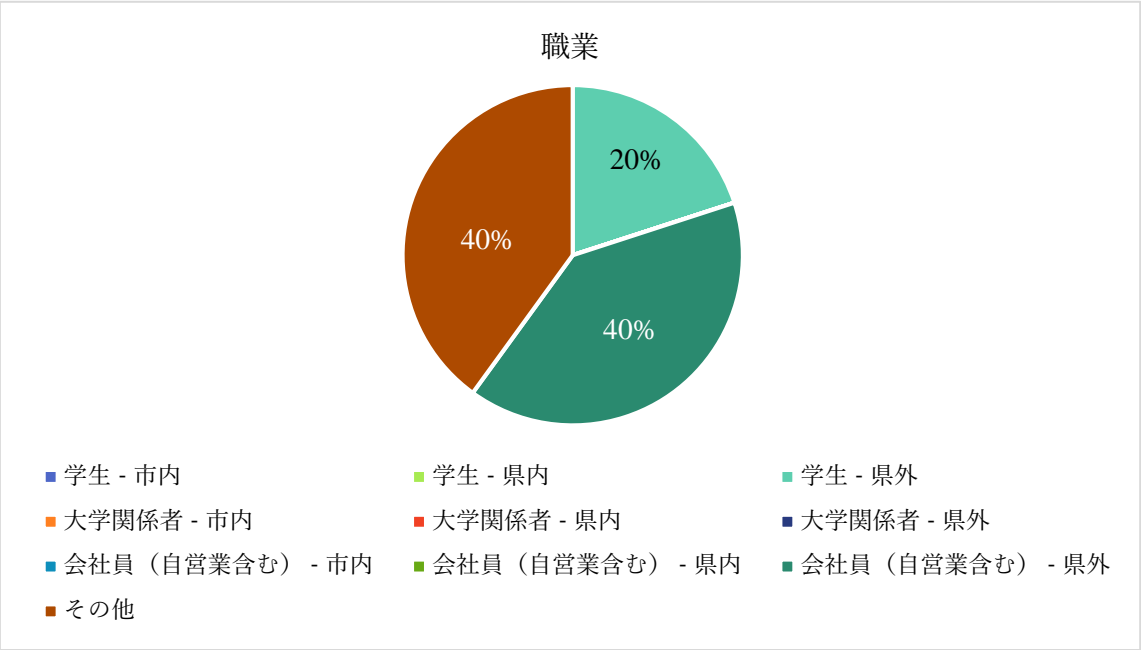
- ただし、新型コロナウイルス感染症の流行という課題が発生している現在においては、再び感染症との闘いという観点も併せて、都市空間・公共空間の再編を考えていくことが求められている。

7. アンケートまとめ

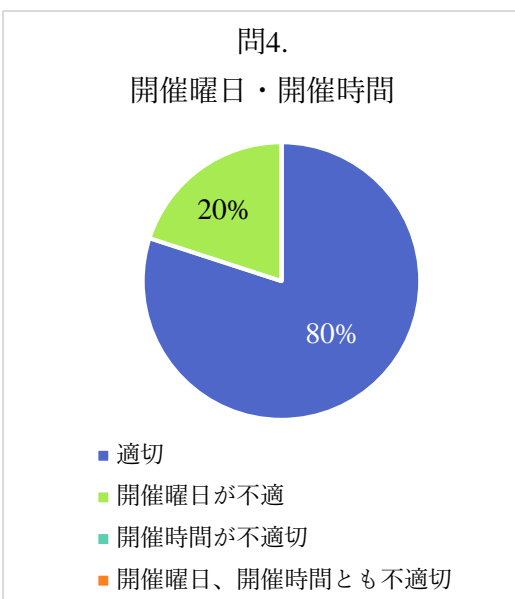
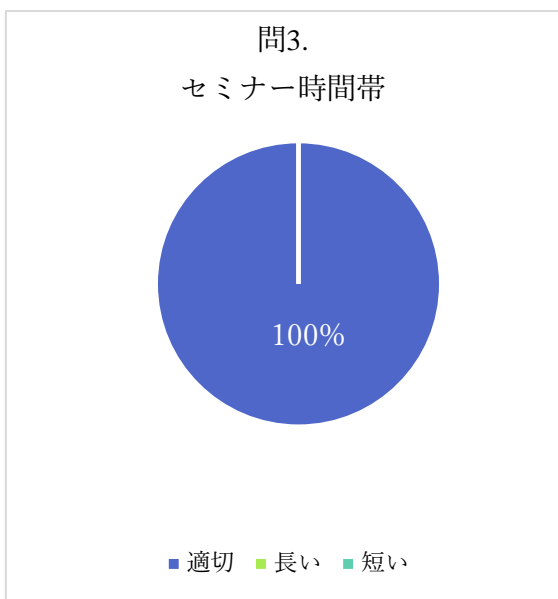
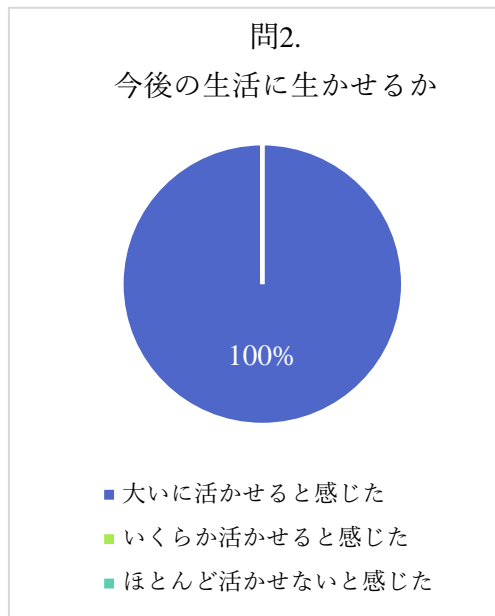
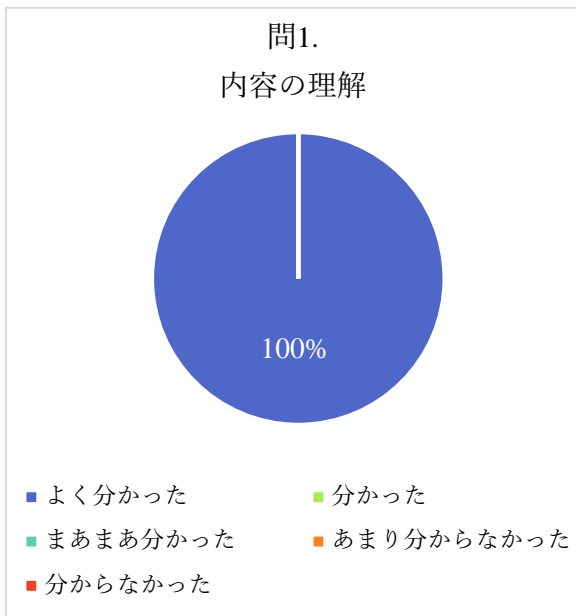
(1) 参加者属性

参加者 11 名のうち、アンケートに回答いただいた方は 5 名、回答率は 45% だった。





(2) 内容について



【自由記入欄回答】

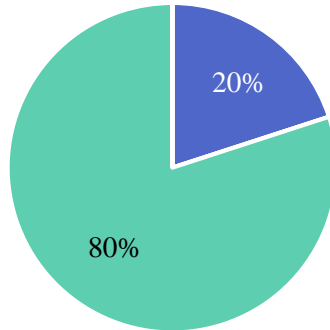
問3. 時間はどうでしたか。

回答なし

問4. 開催曜日、開催時間は適切でしたか。

- 開催曜日が不適切: 土日祝日は避けて欲しい。(30代男性)

問5.
参加動機



- 今回のテーマに関心がある
- アーバンデザインに関心がある
- まちづくりに関心がある
- UDCBKに関心がある
- 友人・知人に誘われた
- なんとなく面白そう
- その他

【自由記入欄回答】

問6. それぞれに関心のあるテーマについて御自由に記載ください。

- 地域の魅力を高める街づくりについて (20代男性)
- 今回のキーワードで出てきたパブリックスペースの活用、コミュニティの作り方等に関心があります。(30代男性)

【自由記入欄回答】

問7. 今回、印象に残ったこととその理由をお聞かせください。

- 富山との事例が印象に残りました。日本で街中広場を作りそして街中に人が流れて行くといったデザインの事例をあまり知らなかったので勉強になったからです。(20代男性)
- 感染症の流行に伴い、都市計画が再編されているところは印象的でした。全般的にとっても参考になりました。(30代男性)
- 今回のお話は、1つ1つにとっても合点がいったので、全て印象に残った。様々な点で、南草津エリアに共通していたり、参考になることが多かったと感じたのが、その理由。お話を伺って、実際、実験に今取り組んでおられる、御堂筋に行ってみたくも思った。(60代女性)